



とー！なまからやさ！！うちなーの紅いも^{べに} （さあ！これからだ！！沖縄の紅いも）

暖地畑作物野菜研究領域
岡田 吉弘（おかだ よしひろ）

沖縄の紅いも

観光地として人気が高い沖縄県では、「紅いも」と称される紫かんしょの生産が盛んで、紅芋タルトなどの加工土産品は、インバウンド消費の拡大に貢献しています。しかし、沖縄県で生産される紅いもの8割強を占める「ちゅら恋紅」は、基腐病に対する抵抗性が十分ではなく、基腐病抵抗性品種の開発が強く求められていました。農研機構では、2023年に沖縄向けでは初となる基腐病抵抗性品種「おぼろ紅」を育成しました。「おぼろ紅」は多収で基腐病に強く、現在、生産現場での普及が始まっていますが、島尻マージ土壌で栽培した場合のアントシアニン含量がジャーガル土壌と比較して低い傾向にあるため、沖縄県内かんしょ産地に多く分布する島尻マージ土壌での栽培に適した基腐病抵抗性品種の育成が喫緊の課題でした。そこで、今回、沖縄向けの基腐病抵抗性新品種の第二弾となる、島尻マージ土壌での栽培に適した「ニライむらさき」を育成しました。

基腐病に強く、アントシアニン含量の高い良食味な「ニライむらさき」

「ニライむらさき」は、アントシアニン含量が「おぼろ紅」よりも高く、土壌型による変化も小さく安定しており、加工業者によるペーストやタルトの加工適性評価は「ちゅら恋紅」と同程度ですが、蒸しいものの食味が優れ、タルト等へ加工した際に製品の風味や食味の向上が期待されるほか、焼き芋などの青果用としても有望な品種です（図1、2）。

「ニライむらさき」の収量性は、4年間の平均値で「ちゅら恋紅」に劣るものの、収量の年次変動は小さく安定しており、また、腐敗いもの発生が少なく、健全いもの安定生産が可能となります。ただし、土壌型によって収量

性に違いが見られ、ジャーガル土壌よりも島尻マージ土壌での収量性が高い傾向にあります。しかし、これらを逆手に取れば、ジャーガル土壌に適する「おぼろ紅」に加え、島尻マージ土壌に適する「ニライむらさき」が育成されたことで、沖縄県内かんしょ産地の主要な土壌型をカバーできる腐病抵抗性品種が揃い、県産紅いもの安定生産に寄与することが期待されます。

紅いもの生産回復に向けて

沖縄の言い伝えでは、琉球は神聖な理想郷であるニライカナイから神が来て始まったとされ、ニライカナイから豊穡がもたらされるという信仰もあります。沖縄のいも産業に、この品種によって新たな明るい将来がもたらされるようにとの想いを込めて「ニライむらさき」と命名しました。「ニライむらさき」は、2025年から栽培が開始される予定で、2027年に50haの普及を目指しています。今後は、コロナ禍を経て表面化してきた沖縄の課題を踏まえて、加工原料用だけでなく、青果用品種の育成に向けて、農研機構では、引き続き沖縄向け紅いも品種の育成に力を入れています。



◀ 図1 「ニライむらさき」の塊根断面



▲ 図2 「ニライむらさき」で試作した紅芋タルト



▲ 「ニライむらさき」のプレスリリース記事はこちら